

## 現代マハッラの女性たち—支援の「受け手」から支援の「担い手」へ— 河野 明日香(ウズベキスタン)

現在のウズベキスタンでは、マハッラ(mahalla)と呼ばれる伝統的コミュニティを核とした国づくりが行われています。おのおののマハッラにはマハッラ運営委員会が設置され、さらにその下に「教育」や「福祉」などさまざまな下部委員会が置かれています。マハッラの女性委員会もその1つで、委員長が中心となり、家庭や女性に関するさまざまな問題の解決や女性への啓発活動など、多様な取り組みを展開しています。

しかし、近年では委員長や女性委員会メンバーだけでなく、マハッラに住む他の女性たちが積極的に女性委員会の活動に関与している様子を見聞きするようになりました。以前、調査を行ったマハッラの女性委員会委員長だった女性は、マハッラ内で企画・実施した慰安旅行について次のように説明しています。

「私が女性委員会の委員長だった頃は、よくマハッラ内の女性を連れてタシケント市内の小旅行に行ったわ。あるときは、マハッラ内に住む女性から『1度も劇場に行ったことがないから、劇場に行ってみたい』という要望が出たので、バスを借り切って市内のハムザ劇場に観劇に行ったの。そのときは、マハッラから38人の女性が参加したのよ。劇場内では、ジュースを飲んだりお菓子を食べたりするのだけど、多くの女性たちがそれぞれ食べ物、飲み物などを買っている中で、数人の女性たちが困ったようにもじもじとしていたの。『どうしたの?』と尋ねると、『お金が無いから、食べ物や飲み物を買えない』と。『それだったらこれを使いなさい』と言って、スム札を渡したの。食べ物や飲み物だけじゃなかったわ。自分のお金を出してバスを貸し切ることもあったし、劇場のチケットが買えない女性にはチケットを買ってあげた。私はいつもポケットに5千スム(約400円)ほど入れていて、女性がお金で困っているのを見ると、いつもそのお金をあげるようにしていたわ」。

このような具体的事例から、このマハッラには自身のニーズを積極的に伝える女性がいること、またそのような要望を出しやすい環境があること、そして、女性たちの要望をきちんとくみ上げる女性委員会という仕組みがあることがわかります。ここで中心的な役割を果たしているのは、もちろん女性委員会の委員長ですが、マハッラに住む女性たちが自身の意見や要望を言える環境がマハッラに存在するという事は非常に重要なことだと考えられます。

現在はまだ、女性委員会の委員長などが中心となり、マハッラ内における女性の支援活動が行われることが多いのですが、女性たちの要望が女性委員会を介し実現されていくことが刺激となり、さらなる女性たちのコミュニティ活動への参加が期待できるのではないのでしょうか。「劇場に行きたい」という率直な要望を出したように、現在のマハッラの女性たちには、支援の「受け手」から支援の「担い手」へとといった意識の転換が必要になってきているといえます。そして、マハッラの女性たち自らが、自身のニーズに合った活動をマハッラ内で実施していくためには、自ら声を上げるのと同時に、周囲の女性たちの声にも耳

を澄ませることが不可欠であるのです。



▲さまざまなマハッラでは、女性委員会委員長が中心となり、家庭内の問題解決や女性への健康教育、子育てなどの女性支援活動を行っている。